

JNDT 観戦記

～ JN を沸かせたトップディベーター達～

中山 昇一

(早稲田 ESA OB、元神戸女学院大学コーチ、十六銀行勤務)

はじめに

来る5月26・27日の両日、京都の立命館大学にて、JNDT 2001の全国予選と本選が行われた。私も今期初めてジャッジとして大会を見たわけだが、正直、モデルすら読んでいない怠慢ジャッジであり、こんなところに寄稿させてもらうのは大変恐縮してしまうわけである。よってここに書くことは、極めて個人的な意見であり、ディベートから半年近く遠ざかっていた一銀行員の考えたことであることを了承頂きたい。

また、ここに取り上げさせてもらったディベーター達以外にも素晴らしいディベーター達はたくさんいるに違いない。あくまで私がジャッジすることになった全国予選・本選の6ラウンドという限られた中で出会ったトップディベーター達のごく一部であることを付記させて頂きたいと思う次第である。また見出しの敬称は略させて頂いた。

松浦大祐(慶応大学)

～システム作りの上手な2AR～

トップディベーター達のトップを飾るのは、慶応の松浦君である。彼がうまいなあと思ったのは、コンストのスピーチもさることながら、リバに入ってから議論の組み立て方であった。よく言われることであるが、プラン後の世界はひとつであり、Disadvantage やケース・アタックはたまたマイナー・リペアーが同時に起こった時に一体どうなるのか？そういうことをイメージしながらラスト・リバトルをできるディベーターがどれくらいいるだろうか？INRにおいてマイナー・リペアーで「憲法改正しないで解釈改憲のみでPKFに参加させる」としながら「SDFは無能で役に立たない」というケース・アタックをINRになっても必死でのばしている大学もあった。そんなディベーターも多い中、彼はBEST12の優勝した東京大学との試合で素晴らしい2ARを見せてくれた。慶応のAffirmative CaseのAdvantageのひとつに「条文がいまいなので官僚に拡大解釈する余地が残っていて違法なPKOに参加できている。しかしプラン後は条文がシンプルになり解釈を歪曲する余地がなくなる」という話があった。これに対し、東京大学は「シンプルになったとしても官僚の拡大解釈の危険性は残る」としてマイナー・リペアーで「官僚でない最高裁の判事などに解釈させる」という話で、このAdvantageを消しにはいった。ここで松浦君は2ARでAdvantageの解決性を強調した上で、この試合でPKOは紛争解決には役立っている(PKFではSDFが殉死するという話が出ていた)ということもラウンドコンセンサスと説明。マイナー・リペアーを打つことでNegativeのサポートするポリシーでは役立っていたPKOに逆に参加できなくなるという説明をしたのである。結局私は、マイナー・ポーターで慶応はBEST12で姿を消したのだが、相手チームの出したマイナー・リ

ペアーにDisadvantageをつけてそれをポーターにしようという発想はAffirmativeとNegativeのサポートしようとしているシステムを明確にイメージして、かつラウンド全体を広く見ていなければできない芸当ではない。今一度、自分たちの使っているそれぞれのイシューの矛盾点や相性を検討すべき大学が多いのではないだろうか？彼のスピーチは久しぶりにジャッジをした私をゾクゾクさせてくれた素晴らしいスピーチであった。BEST8に残っていれば彼がセカンド・ベストディベーターだったらしいが、大いに納得する話である。機会があれば彼のスピーチを追っかけてみるとよいだろう。

大藤善博(獨協大学)

～オーディエンスにも分かるプレゼンテーション～

ディベーター達の議論はシーズンが進むにつれてマニアックになってきて、テクニカル・タームも増えてくる。ぼっときたばかりの怠慢ジャッジには理解についていけない。なんかラウンドしている部屋の中で自分だけが「おいてきぼり」をくらったようなそんな気分になる。そんな6ラウンドの中で「ふっと心地よい気分になれた時」

それが彼の京都大学との準々決勝で見せてくれた2ACを聞いている時だった。獨協のAffirmative Caseのインパクトに「過去の歴史的過ちに直面して反省することが大切」というフィロソフィカルなAdvantageがあった。その重要性の説明において、彼はディベートの試合を例にとり、「負けた試合でジャッジに指摘された悪いところを反省しないと同じ過ちをおかし、また負けてしまう。それと同じで過去の過ちを反省すべき」と説明していた。この説明がいいか悪いかはジャッジによると思う。ただ、少なくともその部屋にいたオーディエンスはただ「歴史的過ちを反省すべきだ」とカードだけ引っ張られたよりは、現実的に「過去の過ちを反省すること」の重要性を認識していたと思う。2ACの彼のスピーチが終わった後の部屋の空気がそう物語っていた。難しいことを難しく説明したり、難しいことをある程度知識のある人に説明する事は比較的簡単だと思う。問題は、難しい話をいかに相手のレベルまで下げて平易な言葉で説明できるか。それがクローズな試合になったときに明暗を分けると思う。それができる数少ない(?)ディベーターの一人にこの試合で私は出会えた。

余談であるが、社会人になった今、できる限り簡単な言葉で説明していくことが、社会に出た時に役立つのではないかと感じている。銀行員としてデリバティブの分からない中小企業の社長さんにデリバティブを説明しながら、時々、学生時代にあのマニアックなプロボでは、簡単な言葉で説明するのに苦労したなあ。なんてちょっと懐かしい気分になる今日この頃である。多くのディベーター達が、身近な例をとって簡単な言葉で説明することでジャッジとディベーターの間に精神的な親近感をも

たらずことをあまり知らないのではないかと思う。

荒川知之(上智大学)

~大胆不敵なイシューセレクション~

3人目は、上智大学を準優勝に導いた原動力の一人である荒川君である。失礼を覚悟で言うと、彼は試合中ずーっとけだるそうである。物腰にやる気のなさがにじみ出ている。自分の席から前の机のところまでほんの数メートルの距離でさえも動くのがおっくうな感じで見ていて思わず笑ってしまう。しかしである。ひとたびスピーチが始まると、それまでのやる気のなさは、相手を油断させる作戦であったのかと思わせるような熱いスピーチが展開される。その中で、特筆すべきことは彼のイシューセレクションである。「石橋をたたいて渡る」という諺があるが、彼の場合は、「石橋は壊れかかっているのに渡り始め、崩れる直前までに渡り切ってしまう」という感じだろうか(笑)?極めて大胆不敵。しかし決して無謀ではなく、だからこそ結果的に敗戦モードの試合をひっくり返してしまう。私はジャッジした6ラウンドのうち、彼を3試合ジャッジした。慶応との全国予選の初戦。上智のNegativeのDisadvantage「アジアの軍拡」に対して、慶応は3分近くかけて12個のレスポンスをした。2NCで荒川君は、30秒でDisadvantageをあきらめTurnaroundの処理だけしてTopicalityを2つとケースプレスをし、2NRではTopicalityを引っ張っている。私はそのTopicalityに入れた。ラウンドの後、私は荒川君に対して、「Disadvantage捨てるのってストラテだったの?」と聞いてみた。彼は何事もなかったかのように「12個も返ってきたから。伸ばすはずだったんですけどね。」と、さらっと答えてくれた。ともすれば敗色濃厚になっていて焦ってしまいがちな中で、冷静に現状を分析して、勝てる確率の高いイシューをスピーチする。こんなイシュー・セレクションを出来るのは、Disadvantage、Topicality、ケース・アタック等、どれも完璧に伸ばせる自信があるからであろう。Negativeの時は、Disadvantageしか伸ばせないなんてことでは、今のディベート界でNegativeの勝率は上がらないんだなぁと感じたものであった。

それから上智大学は、怠慢ジャッジの僕にリフレクをさせてくれた唯一の(慶応もちょっとしたような気も)大学であった。準優勝するような実力を持ちながらも、謙虚にリフレクに来て私にも勉強する機会を与えてくれる。そんなところが素直に尊敬するところである。しかも慶応戦でポーターになったTopicalityの1コンのオーガナイズが分かりにくいとコメントしたら、すぐ翌日のWESSとの準決勝では直してあった。ほんと嬉しかったなぁ。そんな荒川君の影響であるうか?パートナーの森杏花さんも2年生ながら、試合をこなすごとに着実にうまくなっていた。6試合もしてくたいたのはずなのにクロージングのジェネラルコメントを頷きながらしっかり聴いてくれていた。この謙虚な姿勢を忘れなければ、将来すごくうまくなるだろうなぁ。そんな予感がした。だって過去のうまくなったディベーターってみんなジャッジからリフレクで言われたことを着実に直していった人たちばかりだから。「関西ジャッジはイラショナルだから。」確かにその通りなのかもしれない。でも関西で大会がある以上、関西のジャッジからも入れてもらえる。そんな素晴らしいディベーターになってほしいと思う。その意味でリフレクにて試合中のミス・コミュニケーション

ョンの原因を明らかにすることは決して無駄ではないと思うのだが、如何だろうか?

一昔前は、大会のタイムテーブルが全部終わっても、オープニングからなかなかディベーターが帰らず、コミが追い出しに四苦八苦している光景をよく見たが最近あんまり見なくなっただけかなぁと思うのは気のせいだろうか?

倉内英明(早稲田大学 ESS)

~ディベート擦れしていないまっとうなレスポンス~

「都の西北」のトップディベーターである倉内君を4人目に登場させたわけだが、私のジャッジした正直な印象は、「確かに話はうまいし分かりやすい。」でもいざこうして文章で「こういう点」がうまいと表現しようと思うと、うーんと考え込んでしまうこと丸2日。ディベート界の「えなりかずき」の強さ・うまさの素を探っていた私の出した結論は、見出しの通りである。「ディベート擦れしていない」ところなのかもしれない。別の言葉でいうと、「当たり前を返しを当たり前にする」という点である。その意味で、社会人の私が聞いても分かりやすい。ずっと受け入れられる議論として耳に入ってきたのではないかと思った。具体的にどういうことか?準決勝の上智大学との試合。WESSのケースは、「PKOにおいて日本のSDFは十分活躍したのだが、PKO派遣までに憲法の解釈をめぐって牛歩論議が国会でなされる。野党などの反対派がPKO派遣は憲法違反と訴えて議論が遅々として進まないらしい。そこで一刻も早い紛争解決が求められている現地へ、要請を受けたら即派遣できるように憲法を改正しよう」というタイムフレームをAdvantageとしたよく練られたものであった。これに対し上智大学は、マイナー・リペアーで「野党側の反対意見は無視して即PKOへ派遣しよう」というものだった。それを聞いた私の第一印象は、「うわっ、ディベチック。なんと非現実的な。野党側の彼らの意思は保証されないのか?」というものだった。はたして2ACの倉内君の返しは、私の第一印象を的確に汲み取ってくれたものだった。彼は、このマイナー・リペアーにfeasibilityの無いことを指摘し、ファイアットでさえも個人個人の意思までを変えるものではない(魔法の杖ではない)という至極当たり前の議論だった。その上、彼は「憲法で表現の自由は保証されているのでこのマイナー・リペアーは憲法改正を伴いトピカルだ。」という心憎い返しまでさらりとやってのけた。めっちゃめっちゃこよかった。こうした一般常識の範囲内で返すことのできるディベーターが少ないなかで彼のアーギュメントスタイルは現役のディベーターたちは是非参考にしてほしいと思った。

石井恒至(東京大学)

~1ARにプレッシャーをかける2NC~

このコーナーの最後を飾るのは、今大会の覇者かつベストディベーターに輝いた石井君である。彼の凄さはファイナルを観た人は容易に分かるであろうが、1ARにすさまじいプレッシャーをかける2NCである。普通の大学は、2NC+1NRで協力して少しでも1ARをプレスする。しかし、彼の場合は、並みの大学が二人でやるNegativeブロックを上回るプレッシャーを2NCだけでやってしまう。彼と対戦する大学の1ARはたまったものではない。さらに特筆すべきは、相手の議論のつぶし方である。決して一筋縄ではいかないのだ。どういうことか?JNDT

のファイナルを例にとると、Advantage をひとつつぶすのに、「まず Inherency がない」としっかり立てる。その上で Turnaround を打っている。それで十分なのにさらに「マイナー・リベアー」まできっちり立てている。Affirmative がこれを返そうとすると、Inherency を守って Turnaround を切った上で、マイナー・リベアーまで返してやっと Advantage に辿り着くのだ。なんという長い道のり！その上、「官僚サボタージュ」の Disadvantage を新しく出された日にゃ、いいかげん返すのがイヤになってしまうだろう。まさに 1AR 泣かせの 2NC だった。勝利へのあくなき執念を見た気がした。クロージングのアドレスでも竹田さんも言っていた通り、ディベートへのそのパッションは社会人になった私も大いに学ぶところがあった。大学院生が大会に出ることに対するさまざまな議論や批判もあったらしいと聞いた。彼自身にも少なからずプレッシャーはあったのかもしれない。しかし、それをもろともせず、見事優勝したその力量は誰もが認めるところであろうと思う。この先、彼を越えるようなディベーターが誕生することを願っている。

おわりに

好き放題に書いてきました。何のオーソリティーもない一銀行員の分際で、「なにをえらそうに」と思われた方も多かったのではないのでしょうか？モデルも読んでない奴が JNDT などという権威のある大会をジャッジしてもよかったのか？大会が終わって一週間経った今でもそのことは若干ひっかかっています。ただ、私がなぜ JNDT のジャッジの依頼を断らなかったか？社会人だし、「仕事」「付き合い」など断る理由付けには事欠かなかったのに…。その理由は、多くの現役ディベーターたちが「一部のこのプロボに精通したマニア（リフレクで素晴らしいコメントの出来る優秀なジャッジ）」だけを説得して、それで説得したつもりになってしまっているのではと思ったからだ。当然分かっているべき基本的知識(その中には、「基本的」とはとても言い難い専門知識が往々にして含まれているのだが)を分からなかったジャッジに対して「イラショナルだ。」というのは簡単だろう。しかし、それが本質だろうか？

(なかやましよういち)